

---

---

Lord of The Ring RPG リプレイ  
『始まりへの旅』

作・ACRAP（全千葉演戯向上会）  
リプレイ清書・海保 研

---

---

## 目次

キャラクター紹介.....	3
本編.....	4
第1章 爆睡クリティカル.....	4
第2章 奪還！？そしてあ〜れ〜.....	8
第3章 手抜き後の覚醒.....	14
第4章 すっかり忘れてる.....	16
第5章 プレイヤー置いてけぼりで進行する悲劇.....	20
第6章 黒い剣と白い剣が生まれた理由.....	24
第7章 ごめんね。やっと好きにしてよくなるよ.....	29
次回予告.....	34
シナリオ作成メモ.....	35

---

---

## キャラクター紹介

- ◆ ファラシオン  
実は凄いキーマンな男だった事が今回判明。でも内に秘めたる肉欲も尋常でないことが判明しました。ぷぷー
- ◆ フドーリン  
今回は結構脇役だった。でも斧振るって頑張ってたよ
- ◆ バッカニア  
ファラシオンと並ぶキーマン。大活躍。戦闘でもストーリーでも。活躍しすぎ。少しは抑えて。
- ◆ ジョンドレド  
欠席。その後、誰も彼の姿を見た者はいない・・・
- ◆ ゴルブラス＝ブレッカー＝バギンズ  
欠席。でもさりげなくいる事になっていたりする。
- ◆ ガルメア (NPC)  
ゴンドールの騎士隊長。誇り高い騎士、と書くと恰好いいんだけど実際は・・・？
- ◆ アラゴス (NPC)  
人間の王。もし今回の事件がなければその王国 300 年は栄える名君主になっていただろう事は想像に如くはないが、そんな事はどうでもいい。
- ◆ シリヴレン (NPC)  
エルフの族長の娘。もし今回の事件がなければ千年の世に渡りエルフの華よと皆に愛されたであろう事は想像に如くはないが、そんな事はどうでもいい。
- ◆ バラール (NPC)  
ライバルの野伏。邪眼を持ち、人に死をもたらすと言う恐ろしい男だが、実は猫が好き。しかしそんな設定はどう転んでも活かされようがなかった。

# 本編

## 第1章 爆睡クリティカル

マスター「前回までの話ー」

バックニア「俺バックニア！悪い魔法使いサウロンの手下のアマーギンをやっつけた俺たちは」

マスター「・・・いいよ続けて」

バックニア「闇の軍勢と光の軍勢の雌雄を決すべく一裂け谷だっけ？」

ファラシオン「戻っちゃうじゃないか(笑)裂け谷で安穩としているのか？」

マスター「そういうわけではなく、ローハンの角笛城で」

バックニア「一戦を交えた！」

マスター「そうそう。」

バックニア「圧倒的な闇の勢力をちぎっては投げ、ちぎっては投げ、一部ちぎっては食い、ちぎっては食い(笑)」

ファラシオン「いやあ、大変な祭りだった。俺たちは本当に勝ったのか・・・あそこでミスランディアが現れなかったら死んでたな。」

バックニア「全くだ。・・・さて、俺たちはどうなってしまうのだろうか？・・・つづく(笑)」

マスター「つづくなよ！(笑)」

ファラシオン「ナディアは一体何を考えているんだろう？(笑)」

マスター「またナディアとか言うから画像を探すんだよ・・・」

フドーリン「大丈夫だ。画像があっただろう。下に！(笑)」

---

↑『ふしぎの海のナディア』は、ジュール・ヴェルヌによる SF 小説『海底二万リーグ』を原案としたテレビアニメ作品。全 39 話。監督は庵野秀明、キャラクターデザインは貞本義行である。1990 年 4 月 13 日～1991 年 3 月 29 日、NFK 総合で金曜日 19:30 から放送された。

企画の原案は『未来少年コナン』などを制作した宮崎駿監督であったが採用されず、宮崎はそれをスタジオジブリ初のアニメ映画『天空の城ラピュタ』として作品化した。しかし元の企画そのものは NHK に残され、後に本作となった。『天空の城ラピュタ』を連想させる設定（謎の青い石や超古代文明の存在など）があるのはこのためである。製作は NHK とグループ・タックで、ガイナックスがアニメ制作にあたった。また、テレビ放送のダイジェストに新作部分を加えた映画も製作された。この劇場版もガイナックスによるアニメ制作だが、予算を使い果たしてなお完成させることができず、残りをグループ・タックが作成した。この時の借金が返済されるのは『新世紀エヴァンゲリオン』以降になる。

当時、映画や OVA、パソコン用アダルトソフト『電脳学園』の開発などにより、コアなファン層にのみ知られたガイナックスが、放送用に NHK のアニメを作る事でより広範囲に認知される布石となった。その他にも「お色気シーン」が登場するなど、当時の NHK アニメでは考えられなかった要素を加えた事で話題になる。本作はテレビアニメのみならず、劇場用アニメ映画、小説、CD・DVD・LD（おまけ劇場）、ゲームなどにメディア展開した。

作品の中では、旧約聖書の創世記の神話、アトランティスなどの伝説、過去の歴史や SF、マンガ、特撮・映画、アニメのパロディ・オマージュを多数取り入れている。(Wikipedia より) ああ、探したよ！



---

マスター「さて、その後なんだが、熊含め君達のすばらしい活躍は角笛城で有名になったんだけど、依頼が来る。じゃあ、近衛騎士ハマから」

ハマ「我々はこれから角笛城を発ち、ゴンドールの都ミナス・ティリスへ向かうことになった。そこで、お主等にはミナス・ティリスへの先遣隊を努めてもらいたいのだ。この角笛城を発ち、先にミナス・ティリスへ向かって欲しい」

ファラシオン「ミナス・ティリスの情勢は？」

マスター「まあ、闇の勢力との最前線だからローハンと連携を取って—ということもまだわからないんだけど、とにかくその辺りも含めて情勢を探ってきて欲しい。密偵というわけではないんだけどね。もちろん。」

ファラシオン「じゃあ、ミナス・ティリスに行った後は戻ってくるの？」

マスター「戻ってくる。かもしれない」

バックニア「まあ、その状況次第ってことだな」

マスター「どこへ戻るかについては追って指示をするから、とにかくミナス・ティリスに向かって欲しいということである。で、ゴンドールの騎士ガルメアと彼の部下10人と共に向かうことになる」

ファラシオン「10人!？」

バックニア「大丈夫だよ、最初のフラグで一気に8人くらいいなくなるから(笑)」

フドーリン「ありえる!」<sup>2</sup>

バックニア「その中にジョンドレドいなくなる可能性が」

マスター「ジョンドレドいないよ。ローハンの騎士なんだから、もう役目に戻った」

ファラシオン「東の間の邂逅だったな・・・」

マスター「ゴルブラスも気がついたらいなくなっていた<sup>3</sup>」

バックニア「ゴルブラスも!?(笑)」

フドーリン「あんな大怪我しているのに」

マスター「そうだ。前回怪我を負っているはずだが、それは直っていないよ。」

バックニア「直ってないの？」

マスター「まあ、鍛錬だけは直ってていいけど」

フドーリン「裸は?(笑)」

マスター「頼むから直しておいてくれ!」

だったが、プレイヤーがメモしていなかったので直っていたことにした。

マスター「さて、ガルメアに会うよ」

ガルメア「ふん。お主等が、先の戦いで功績を残した者たちか」

ファラシオン「いかにも! 私が灰色港のファラシオン!」

バックニア「いかにも! 俺がバックニア」

フドーリン「いかにも! 俺が熊!」

バックニア「3人合わせて!」

ファラシオン「熊!(笑)」

フドーリン「ええー!? 熊でいいのーっ!？」

ファラシオン「お前が下の人だから。」

フドーリン「下の人などいない!(笑)<sup>4</sup>」

---

<sup>2</sup> 前回「角笛城の白銀」参照。合流した騎士4人はあつと言う間にいなくなっていた

<sup>3</sup> プレイヤーいないし、なくなった事にする。ガンダルフがどっかに連れて行ったとでも考えてくれればいい

---

ガルメア「エルフに、若造に、ホームレスか・・・よく戦えたものだ。」

バックニア「ホームレスって！？(笑)」

フドーリン「まだ服着てないの俺！？」

ガルメア「くれぐれも我々の足だけは引っ張るなよ！」

ファラシオン「へっへえ～、わかりましたあ」

バックニア「高貴なエルフのセリフとは思えん」

ガルメア「明朝明け方にはここを発つ！寝坊するなよ！」

ファラシオン「お前こそ寝坊するなよお！」

フドーリン「じゃあな！」

バックニア「フドーリン、服！服！(笑)」

マスター「さて、明朝発つ事になるんだけど、ガンダルフが君たちの部屋に尋ねてきた」

ガンダルフ「ご苦労だったの」

ファラシオン「貴方はどうされるのです？」

ガンダルフ「ワシはこれから行かねばならない所があるのでな。」

ファラシオン「そうですね(笑)」

ガンダルフ「その前に、フドーリンとやら、お主にこれを渡しておこう」

マスター「と言って、木のお守りをフドーリンに渡した」

バックニア「熊になっても服が破れない魔法の道具だ」

マスター「そんなもんはねー」

ガンダルフ「お主が熊に変身するのはいいが、野生に流されてはいかん。流されては闇の思う壺じゃ。」

フドーリン「そんな事言ったってよお・・・」

ガンダルフ「このお守りは熊に変身するのを抑える働きがある。これでそうそう熊になることはないじゃろう」

フドーリン「ていうことは俺の意思で熊になれるっていうことだな。」

ガンダルフ「うむ。バックニアとかいったかの、お主の白い剣を見せてもらえるかの？」

バックニア「おう。白も黒もあるから」

ガンダルフ「(抜いて)これがエステル・シィリヴレンか・・・」

マスター「で、ガンダルフはしばらくこの白い剣を眺めた後・・・」

バックニア「『萌え～』と？(笑)」

ガンダルフ「この白い剣は黒い剣と共に『指輪』に比肩する強力な武器じゃ。心して扱うのだ。」

ファラシオン「比肩！？」

ガンダルフ「くれぐれも、角笛城の先の戦いの時のように使うでないぞ」

バックニア「わ、わかったんだな(笑)」

ガンダルフ「では、さらばじゃ！」

マスター「と言ってガンダルフは去っていった。」

マスター「さて、翌日君達はガルメアと合流した」

ガルメア「遅かったな！」

ファラシオン「時間通りではないですか！？」



---

ガルメア「2分遅れている」

フドーリン「俺の時計では2分早いぞ！」

バックニア「俺の腹時計では丁度だ！」

ガルメア「腹時計だの、狂った時計だのに頼っておって！！」

マスター「ということでガルメアに怒られながら君たちは出発することになった」

ファラシオン「これだから人間は」

フドーリン「これだから熊でない奴は」

ファラシオン「ほとんどじゃねえか！(笑)」

マスター「さて、バックニア知覚ロールして」

失敗

マスター「さて、旅は何事もなく(笑)、5日位経過するが、ガルメアと会話していたんだけどー」

バックニア「やっぱりいけすかない奴だったか」

マスター「まあ、プライドが高いなあ、と」

ファラシオン「部下もプライド高いの？」

マスター「うん」

ファラシオン「騎馬民族の癖にやけに気位が高いなあ、と。」

マスター「まあ、ガルメアは元々はゴンドールの騎士だからね」

ファラシオン「ガルメアよ、お主はなぜゴンドールからローハンの来ているのだ」

ガルメア「私だけ来たかったわけではない。命令だからな。お主等のように気ままに自由にやるわけではないのだ！」

ファラシオン「ムカ」

フドーリン「(ファラシオン、出向されてきたんだ)」

ファラシオン「クビ？」

フドーリン「そんな事言うな！(笑)」

バックニア「ところでガルメア殿、貴方はゴンドールに戻ったらどうするんだい？」

ガルメア「知れた事！闇の軍勢と戦うのだ！」

バックニア「いきなり！？でも我々は調査だけでは……」

ガルメア「ゴンドールの騎士がゴンドールに戻ったのだ、戦う以外にない！」

ファラシオン「私たちも」

ガルメア「当然だ！」

一行は騒然となる

ガルメア「時に、バックニア殿、その剣を見せてもらえないだろうか？」

バックニア「……」

ガルメア「みせてもらえないだろうか？」

バックニア「……」

ガルメア「見せろと言っている！」

バックニア「……囲まれるんでしょ？」

マスター「うん」

ガルメア「見るだけだ。」

バックニア「じゃあ見せるよ。はい見せた。」

ガルメア「貸し……てくれ(笑)」

バックニア「ええ～っ！？貸すの？ガンダルフのおじちゃんに早々に人に見せるなって言われたんだよね」

---

ガルメア「白い剣・・・先の角笛城の戦いではかなりの功績を誇ったそうだな」

バックニア「違うよ！何を言ってるの！？あれは俺の力だよ！」

ガルメア「そうは見えないな」

バックニア「(ムカ)・・・もう貸さねえ！もう頭来ちやった」

ファラシオン「まあまあ、見せてやったらどうだ？そうしないと話がすすまなそうだし(笑)」

マスター「そんなこたねえ(笑)」

バックニア「まあ、ファラシオンがそう言うんだったらしょうがねえなあ。ほらよ」

ファラシオン「もし、変な真似をしたら私の呪文でぶっ潰す」

マスター「ガルメアはこの剣を相互に見ながら」

ガルメア「なるほど。かなり凄い剣だな・・・」

バックニア「欲しくなってきただろ～、これさえあれば国が守れると思ってるだろ～、My Precious とか思ってるだろ～(笑)」

ガルメア「なるほど、すまなかった」

マスター「と言って返してくれたよ」

バックニア「今回は素直に返してくれたのね」

マスター「さて、その夜。知覚ロールをしてくれ」

知覚ロールをしたが、一行は全く目が振るわない。というかバックニアがファンブルを出して、爆睡していた。

マスター「翌日。朝起きるとー」

バックニア「ガルメアがいなくなっている」

マスター「その通り」

ファラシオン「何？部下も？」

マスター「うん。ついでに言うと黒い剣と白い剣も一緒にいなくなっている」

ファラシオン「うおおおおおおおおおい！？(笑)」

バックニア「お前だって知覚ロール失敗してんじゃねえか！何も聞こえなかったのかよ！？」

ファラシオン「エルフだったからこそ聞こえなかったんだろ！(笑)」

バックニア「全く役に立たなかったエルフだな！」

ファラシオン「だって、お前が持ってたんだろ！」

マスター「・・・ファンブルだったからな(笑)」

## 第2章 奪還！？そしてあ～れ～

フドーリン「じゃあ、とりあえず<追跡>してみよう」

バックニア「そうだな、建設的に追跡してみるよ」

こっちのロールは（難度が低かった事や野伏であるフドーリンがいたこともあり）無事に成功する

マスター「馬の蹄の跡が続いている」

バックニア「奴らどこに行くつもりだ？このままゴンドールに行くつもりとは思えねえ！まさかサルマンの・・・」

ファラシオン「そんなことおおらへんやろ～<sup>5</sup>」

---

<sup>5</sup> またしても大木こだま・ひびきね。何でこいつらこんなん知ってるんだ？



---

バッカニア「でも、お前の師匠はそうだった。」  
ファラシオン「あ、ホントだ(笑)とにかく全速力で追おう！」  
フドーリン「いざゆかん！」

ということで、全速力で追跡する。幸い馬が残っていたので追いつきそうである

マスター「じゃあ、三度知覚ロールをしてくれ」

今度は面目躍如とばかりにバッカニアが大成功

マスター「さて、バッカニアが気がついたんだけど、遠くの方に一袋小路になったところが見えるんだが—どうやら君たちを待ち受けているようだ」

バッカニア「敵編隊発見！距離2千！どうやら私たちが待ち受けている模様です！」

ファラシオン「向こうはこっちに気がついている？」

マスター「いや、それはない」

幸いにも、こちらが先に発見することができたので、こちらから奇襲を仕掛けることができる。

ファラシオン「幻術系を使おうかな・・・」

バッカニア「姿消えろ」

フドーリン「ていうか眠らせろ」

バッカニア「ていうか爆発させろ」

フドーリン「ていうか殺せ(笑)」

ファラシオン「わかったよ！」

バッカニア「ああ俺言っとくけど、得物もないからな」

ファラシオン「フドーリン、ダガーを貸してあげれば？」

フドーリン「しょうがないな、のび太君は。出刃包丁<sup>6</sup>」

ファラシオン「・・・やっぱり幻影系かなあ。気づかれずに近づける？」

マスター「ごつごつした岩場という設定だからな・・・近寄れるよ」

ファラシオン「よし、じゃあお前ら俺の30cm以内に寄れ。＜霞隠れ＞を使うよ。」

ということで、ファラシオンの魔法でまた別の呪文のかかる範囲まで接近した

ファラシオン「10人全員いる？」

マスター「いるよ、正確には(ガルメア入れて)11人だが」

ファラシオン「そいつらレベルいくつ？」

マスター「・・・わかんねえ」

ファラシオン「そいつらのいる地形を描いてよ」

---

<sup>6</sup> 声；大山のぶ代。譲る気はない。

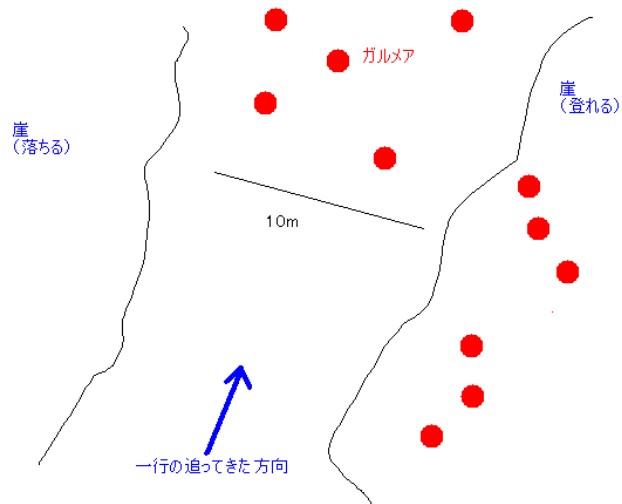


図 1 描いた

マスター「こんな感じにしようかな (図 1 描いた)」

バックニア「岩場に隠れているんだろうな・・・」

ファラシオン「こいつら見えてるの？」

マスター「書いちゃったしね(笑)」

一行は作戦会議をする事数分

ファラシオン「今回 3 人しかないからかなり手強いと思うんだけど・・・」

バックニア「こんな事だったらジョンドレドから魔法の剣取り返してくればよかった・・・」

ファラシオン「じゃあまず (手前の 3 人) こいつらを潰そう」

バックニア「あいつらの目的は挟み撃ちにすることだからな」

ファラシオン「じゃあ・・・ギリギリまで近づいてその後で<虚像>7を作り出す。反対側の道の方に俺たちの幻影を作り出す」

バックニア「おお、すばらしい。格好よく作ってくれよな。男前に」

ファラシオン「俺はな。お前はお前なりに、熊は熊なりに(笑)」

フドーリン「いきなり！？(笑)」

ファラシオン「で、みんなが気を取られてる隙に俺は近場の 3 人に<痺れ雲>をかける。後はお前らつつこんでくれ」

フドーリン「縛り上げる自信がねえなあ」

ファラシオン「縛り上げなくていいよ！殺していいよ！」

さて、このファラシオンの作戦が開始する。隠れて (透明になっているので問題なし) 接近し

ファラシオン「<虚像>を唱える。虚像と言っても大きな像じゃないよ」

虚像の詠唱は成功する

マスター「うん。虚像の方を見たよ」

ファラシオン「よし、じゃあ<痺れ雲>！」

7 30 マスター以内に幻影の像を作り出す呪文。囀目的のような今回の場合は効果的であるだろう

---

---

手前の3人に対して痺れ雲が炸裂する。電撃の痛打を与える。

マスター「一人目は盾を持った腕を直撃、金属の鎧を着ているので気絶」

バックニア「お、やったじゃん。次」

ファラシオン「よし、じゃあ二人目（サイコロを振る）」

マスター「同じく！」

ファラシオン「よし！（更にサイコロを振る）」

マスター「閃光が走る。1ラウンド麻痺」

ファラシオン「よし、殺せ！で、すかさず俺は呪文準備を行う」

バックニア「二人躍り出る！」

この不意打ち気味のフドーリン、バックニアによる攻撃<sup>8</sup>。まずはバックニアの一撃で胸に軽傷を与え、麻痺を累積させる。更にフドーリン

フドーリン「それでは、斧を振り下ろす」

しかし、この一撃は派手にファンブルしてしまう。01

ファラシオン「おい~~~~~！」

マスター「(ロールの結果)息切れを起こし、胸が苦しくなる、2ラウンドの間行動力-40。」

バックニア「何やってんだお前は~！」

マスター「さて、他の連中は襲撃に気がついたが虚像も残っているので躊躇っている。」

ファラシオン「だって虚像の方も挑発的な態度だから(笑)」

マスター「立ってるだけっていったやん」

フドーリン「立ってるよな。中指が(笑)」

さて、笑っている間に手前の一人はバックニアの一撃で戦闘不能になった。

バックニア「落とす。ということで」

そしてここから通常の戦闘の突入する。まずはファラシオンが弓に持ち替える。ちなみにファラシオンはまだ<霞隠れ>の効果が継続しているため、姿が見えない

ファラシオン「どこから矢が飛んでくるかわからない！これが野伏の戦い方！」

フドーリン「そうか！(笑)<sup>9</sup>」

マスター「で、相手の内一人が混乱から立ち直って、こっちに向かってきた」

ファラシオン「俺はこっちが本物だと・・・お、思うよ！？(笑)」

更にガルメア率いる5人が奥から向かってきた。

バックニア「よし、じゃあ俺は（その向かってきた奴）を一撃で殺すぜ！」

目は良かったが、相手が盾を持っているためダメージは高くない、しかし痛打が

マスター「片足の膝下を切断・・・毎ラウンド打撃20、ていうか倒れて意識を失う」

宣言通りに一人仕止める。一方フドーリンは崖上の敵に接近して攻撃をしかける(図2 現在の戦況)

---

<sup>8</sup> よく考えたらこの二人痺れ雲の効果範囲内に躍り出していないか？電撃痛打を受けるはずなんだが、忘れてた。

<sup>9</sup> いちいちいらんと思うが、ファラシオンの職業は魔術師です

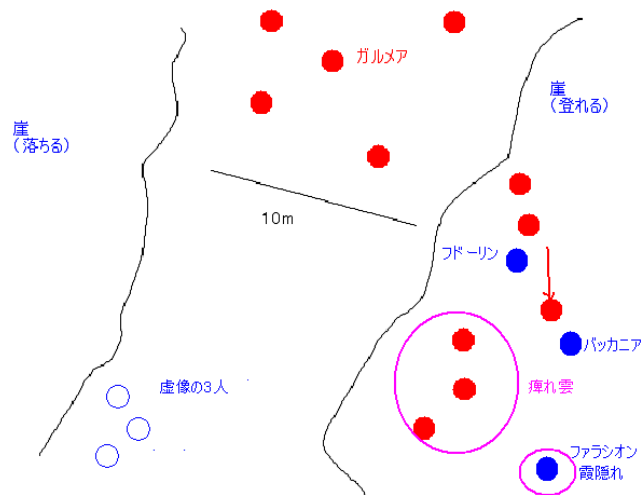


図 2 現在の戦況

フドーリン「(息切れの) -40にもめげねえぜ！」

しかし、出目が良かったためめげない一撃が炸裂する。瀕死のダメージを与える。痛打は大した事なかったが打撃そのものが強烈だった。

フドーリン「ふらふらふら～って(笑)」

続いて次のラウンド。神速でバックニアが動く

バックニア「フドーリンの獲物を横取り。行くぜ！」

フドーリン「お前！俺の得物を！」

15点のダメージを与え、痛打で前腕に軽傷を与え、麻痺を累積する

バックニア「ジェットストリームアタック<sup>10</sup>だ！二人しかいないけど」

マスター「・・・じゃあ、こいつもダメだな。戦闘不能になった」

続いてファラシオンが残る一人に弓を放つ。見えない状態から攻撃したので命中するが、所詮魔術師の弓、大したダメージにならず

マスター「そうすると、今度はこっちガルメア達の番だが、バックニアとフドーリンに部下が襲われているのを把握し、逃げていく」

フドーリン「逃げていく！？」

ファラシオン「くっそお・・・寝かしてやる！」

バックニア「そんな事できるのか？」

<sup>10</sup> 黒い三連星が使用した攻撃フォーメーションの名前である。まずメンバーそれぞれが搭乗したモビルスーツが縦一列に重なって並ぶ。そしてそのまま攻撃対象に向かって接近し、1機目が対象に一撃目を加えてすぐさま列から離れ移動、直後に2機目が同様の箇所に攻撃を加える。これを3機目まで実行する。ちなみに黒い三連星だが下画像左から正統・復刻・ネタ



---

ファラシオン「できるよ。呪文準備しなければいけないけど・・・」  
バックニア「まあ、正しい選択だな。状況判断の出来る奴だ」  
フドーリン「とりあえず追っかけよっか？」  
バックニア「どうしたもんかな。じゃあ追っかけよう」  
マスター「じゃあ、届かないまでも追いつるとかでいい？」  
バックニア「発信機を仕掛ける」  
マスター「そんなものは持っていない。しばらく追いかけるとガルメアは岩場で立ち止まった」  
バックニア「この泥棒猫が！」  
ファラシオン「剣を返せ！」  
ガルメア「あっという間に我々の部下が5人もやられるとはな・・・さすがと言っておこう」  
バックニア「貴様も悪の手下かこの野郎！」  
ファラシオン「何が目的だ!？」  
ガルメア「ほう、よくわかったな」  
マスター「と言うと、君たちの周囲にたくさんオークが現れた」

うるたえる一行

バックニア「多くのオークがあー！」  
ファラシオン「プッ————ッ！」  
フドーリン「額に肉などとプッ————ッ!(笑)これもちゃんと絵が入っているはずだ(笑)<sup>11</sup>」  
バックニア「大変だなマスターも(笑)」  
ファラシオン「オーク何匹？」  
マスター「完全武装のオークが30匹」  
ファラシオン「俺は見えていないからね」  
マスター「前に騎士5人、後ろにオーク30匹。バックニア、ファラシオン、フドーリンか」  
ファラシオン「い、いつの間に？」  
ガルメア「私の方が上手だったな！」  
ファラシオン「みんな、逃げよう！180度転進だ！！」  
バックニア「どうやって逃げるんだよ？この状況で。後ろにはオークが一杯いるんだから。」  
マスター「さて、そんな事やっている間につかまってしまった。オーク達の刃が君たちの首筋に突きつけられている」  
バックニア「降参だ、降参！」  
ガルメア「いい心がけだ。このまま生かしておくわけにはいかない」  
バックニア「それはカンベンしてくれないかな。捕虜の取り扱いは南極条約<sup>12</sup>に則ってもらうよ！」  
マスター「また脚注を俺にふらせるのかよ！！(笑)」  
バックニア「よかったわかって。頑張れよ」  
マスター「さて、ここで事態は一気に変わる。ガルメアが高笑いをしていると黒い剣と白い剣が光りだ



<sup>11</sup> お前ら、マスターを何だと思ってるんだ!？」

<sup>12</sup> 1957年～58年の「国際地球観測年(IGY)」に南極において実施された国際的科学協力体制を維持、発展させるため、1959年、日、米、英、仏、ソ等12か国は南極条約を採択した。  
ではなく、「一年戦争の初期に地球連邦とジオン公国の二国間で調印された戦時条約、それが南極条約だ。地球の南極で調印されたこの条約では、コロニー落としや核兵器、生物・化学兵器の使用の禁止、**捕虜の取り扱い**に関して規定をしたのだが、その後この条約は連邦・ジオンの二国間に限らずあらゆる地球圏の勢力に適用されるようになった。」

---

した。で、更にバッカニアの懐にあった（前回もらった）南寇の紋章も光りだしている」  
バッカニア「そんなのもらったっけ？（キャラクターシートに）書いていないんだけどなあ」  
ガルメア「な、何だこれは！？」  
マスター「という声は遠くに聞こえ、まばゆい光と共に君達は意識を失った。13」  
バッカニア「手抜きじゃないか！（笑）」

### 第3章 手抜き後の覚醒

バッカニア「う、ここは一体・・・フドーリン、生きてるか？」  
フドーリン「どうなっているか俺にもわからん」  
バッカニア「ファラシオン、MPは回復しているか？」  
ファラシオン「おお、回復している(笑)」  
マスター「まあ、いいけど。」  
バッカニア「で、ここは一体どこなんだ！？確か、ベル兄いにもらった紋章が光りだして・・・」  
マスター「ない。なくなっている。ついでに言うと、黒い剣と白い剣もない。」  
フドーリン「なぬ！？」  
ファラシオン「で、ここはどこなんだ？」  
マスター「森」  
ファラシオン「森い？なんで森にいるんだ？」  
バッカニア「エルフだろ？何とかしてくれよ」  
ファラシオン「わかった。何とかする・・・・・・・・・・周りを見渡す」  
マスター「さて、森は森なんだけど、何となく見覚えがあるようなないような森」

エルフであるファラシオンが<知覚>ロールを行う。結果は大成功だったが・・・

マスター「ココまで出てるんだけど、出てこない」  
ファラシオン「4文字なんだよ、4文字～」  
フドーリン「さ、最初の文字いってごらん(笑)」  
マスター「そういう風にボケあっていると、遠くの方で悲鳴が聞こえる」  
バッカニア「パンツを引き裂くこの声は！駆けつける！」  
ファラシオン「ちなみに俺ら持ち物どうなってるの？」  
マスター「黒い剣と白い剣以外は全てある。悲鳴の方に向かうと、森の中なんだが、エルフの娘が3匹ほどの狼に囲まれています。ていうかワーグ」  
バッカニア「熊いけ熊！」  
フドーリン「今日のメシは犬鍋か～」

というわけで、エルフの娘を救うためワーグ3匹との戦闘に突入する。

バッカニア「お嬢さん、ここは我々にお任せを！」  
エルフの娘「誰ですか貴方たち？」  
ファラシオン「違——う！灰色港のファラシオンとは私の事だ！」  
エルフの娘「はあ・・・(笑)」



---

ファラシオン「その娘何族だよ？」

マスター「ノルドールエルフだよ。」

ファラシオン「ノ、ノルドール!？」

バックニア「ノルドールって何？」

ファラシオン「一番高貴な種族だよ。何故ノルドールがこんな所に・・・いや、そんな話は後だ!(笑)」

まあ、狼の前でボケツッコミをしているわけにはいかない。狼が噛み付いてくる。フドーリンとバックニアにそれぞれ1匹づつが攻撃を行う。バックニアへの攻撃はかすり傷に留まったが、フドーリンへの攻撃は11点と少なからぬダメージとなり、痛打

マスター「ごめん! 武器を持った腕にかみつかれて、腕が使えなくなる。」

バックニア「フドーリンーーーー! 噛み付き返せ!」

バックニアはフドーリンを救うため、フドーリンの腕に噛み付いている狼へ攻撃を行う。この一撃が必殺の一撃となる。また、最高レベルの痛打を与えてしまう。

マスター「背骨を切断、即座に昏倒。」

フドーリン「俺の手には上半身だけの狼が(笑)」

最後の1匹の狼が更にフドーリンに攻撃するが、かすり傷で終了。こちらのターンだが、ファラシオンは呪文準備をし、フドーリンは腕に残ったワグの死骸を外して終了する。

続いて次のラウンド。相変わらずワグの方が素早いので先手を取られる。しかし、ワグ達の攻撃は出目がよくないため、かすり傷にしかならない。そして、ファラシオンが『眠り』を発動する。この呪文詠唱によってワームの内1匹は寝てしまう。

マスター「フドーリンの前にいたワグは寝てしまった。次のターン。みんなの行動だよ。」

そして、フドーリンが残りの1匹にダメージを与え、更にバックニアがトドメを刺してあっさり狼を成敗する。

バックニア「お嬢さん、大丈夫でしたか？」

エルフの娘「はい、大丈夫です。危ないところをありがとうございました。」

フドーリン「礼には及ばないって(笑)」

ファラシオン「何を言う! お前たちは知らないかもしれないが、凄いだよこのエルフは! 俺たちとはレベルが違うんだ!」

エルフの娘「仲間と一緒に来たのですが、はぐれてしまいました。」

ファラシオン「仲間と言うと何人くらい？」

エルフの娘「15人くらいです。」

ファラシオン「15人か。多いな」

エルフの娘「人間の方々です。一緒に探していただけないでしょうか？」

バックニア「お安い御用だ」

ファラシオン「よかろう! で、貴方たちはどこから来てどこへ行くのだ？」

エルフの娘「私はこの近くのエルフの里の者です。」

ファラシオン「あ、この森は何と言う森なのだ？」

エルフの娘「この森に名前なんてありませんわ。」

ファラシオン「ないのか・・・ここは一体中つ国のどこらへんなのだ? いい質問だろ?(笑)」

エルフの娘「霧降山脈の東側です。」

ファラシオン「では、ロリエンから来たのか？」

---

エルフの娘「ロリエン・・・とは？」

ファラシオン「ロリエンを知らないのか？じゃあファンゴルンは？闇の森は？」

エルフの娘「ファンゴルン、闇の森・・・それは聞いたことがあります。」

ファラシオン「・・・えーと、ちょっと心に浮かんだ事があるけど、黙っておく。」

バックニア「何だよファラシオン。言いかけた事途中でやめるなよ」

ファラシオン「で、どこに向かうつもりだったのだ？」

エルフの娘「人間の王の方のところですよ。アラゴスという方ですが・・・」

マスター「と、話していると向こうから見つかった。15人くらいの騎士団。そのうち一人は明らかに身なりがいい。」

ファラシオン「ああ・・・見た事は・・・」

マスター「もう少しマジレスすると、記憶にもやがかかったようになっている」

ファラシオン「もやもや病？」

フドーリン「もやもや病は違うぞ、お前ももう年なんだからー」

人間の王「おお、シィリヴレン。こんな所にいたのか！」

バックニア「シィリヴレンって、白い剣と同じ名前じゃないか・・・」

エルフの娘「アラゴス様！この方々が助けてくださったのです！」

アラゴス「ありがとう。お主達は？」

ファラシオン「私は灰色港のファラシオン。貴方は灰色港をご存知か？」

アラゴス「いや、私は・・・」

ファラシオン「だんだん確信に近づいてきた。エルフは知っている筈だが・・・」

マスター「シィリヴレンもきょとんとしている」

バックニア「灰色港なんて俺も知らないよ」

ファラシオン「お前も知らなくてもいいんだよ。」

フドーリン「俺だって知らないよ。エルフなら知っているものなの？」

ここで身に起きた異変の真相に一気に近づく

ファラシオン「昔はそこは港じゃなかったんだよ」

.....

バックニア「俺たちは Gondol に向かっていたんだが。悪い奴らに狙われてな。持ち物を盗られてしまったんだよ。」

アラゴス「それは難儀なことだな・・・しかし、Gondol とはどこのことだ？」

ファラシオン「人間の都のことだ・・・ただ、Gondol の事を知らないのか？」

アラゴス「私はここから東のとある国の王である」

ファラシオン「トアール国でいいんじゃない？」

マスター「じゃあ、トアール国でいいや(笑)トアール国。」

アラゴス「まあ、お主等がどこへ向かうかはよくわからないが、せっかくシィリヴレンを助けてくれたのだ、お礼がてら私の国で歓待したいのだが・・・」

ファラシオン「まあ、一晩くらいであれば・・・」

## 第4章 すっかり忘れてる

マスター「で君たちはそのままアラゴスに連れられてトアール国に着いた。大きな国ではない。で、君たちはその夜向こうが宴会を開いてくれた」

ファラシオン「お前たち、ちょっと言っておく事があるのだが・・・」



バックニア「なんだい？」  
ファラシオン「俺たちはどうやら違う時代に来ているらしい<sup>14</sup>」  
フドーリン「そんなことないやろ〜(笑)」  
バックニア「何を言い出すかと思えば、お前飲みすぎちゃっているんじゃないの!？」  
ファラシオン「まず、こんな所にノルドールが歩いている事・・・」  
バックニア「今はいないもんなのか・・・」  
ファラシオン「いなくはないが、とても希少だ。それとゴンドールを知らないと言う事自体がまずありえない。」  
バックニア「それはそうだなあ。ゴンドールってのはいつできた国なんだ？」  
ファラシオン「2,300年前だ。決定的なのは灰色港を知らなかった。ノルドールの国に渡る窓口であるそれを知らない事もありえない。元々はそのあたりはベレリアンドというエルフの王国があつて、そこは陥没してしまうんだ。その端っこが灰色港になるんだが、灰色港を知らないと言う事はそれより前だ。」  
バックニア「じゃあ何かい？俺たちは昔の時代に来ちゃったって事？」  
ファラシオン「そうとしか考えられんのだ。」  
バックニア「そんなバカな・・・どうやって来たんだよ？」  
ファラシオン「わからん！あの手抜きの手抜きの白い閃光のせいとしか考えられんだろうが(笑)」  
フドーリン「ビヨルン族はいないのかな。」  
ファラシオン「人間自体いないからな。」  
フドーリン「てことはこの世界で熊になれるのは唯一俺だけか(笑)」  
バックニア「今、何年か聞いてみればいいじゃないか。」  
ファラシオン「暦法が同じとは限らないだろ？」  
バックニア「・・・ま、いっか(笑)」

この後調査。よくよく調べてみると、マスターの想定していた歴史軸であれば灰色港は存在していた頃になる。修正。

バックニア「とにかく、今日は疲れたから寝よう。もう何だかわからんよ。」  
ファラシオン「知恵熱が出る(笑)」

翌日になり、前日まで受けていたダメージは回復したが。

マスター「翌日。打撃は半分回復していいよ。君たちが起きると、アラゴス王の朝食に招待された」  
アラゴス「おお、起きてたか。今日は私の弟を紹介しよう」  
マスター「と言って、14,15歳くらいの少年を紹介された」  
アラゴス「弟のグウェウだ。仲良くしてくれ」  
グウェウ「初めましてグウェウです。よろしくお願ひします。大きい人ですね、何で服を着ていないんですか？」

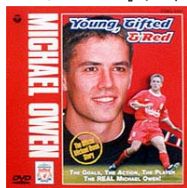
14 こんな感じ



フドーリン「ええー——っ？」  
マスター「と、グウェウは素直なとてもいい少年で、懐かれた(笑)誰が懐かれた事にしようかな」  
バックニア「フドーリン？裸だから？(笑)」  
フドーリン「じゃあ、俺は肩手にこうやってのっけて・・・」  
マスター「ということで、一日調べたりしていてもいいんだが・・・」  
ファラシオン「俺は森を楽しんでる。・・・木々が生き生きとしているなあ」  
バックニア「水がキレイだなあ」  
フドーリン「俺は養生しているよ」  
マスター「・・・そんな1ヵ月後・・・(笑)」  
ファラシオン「いっかげつごお!？」  
バックニア「いつの間にかこの生活に馴染んでる!？」  
フドーリン「あーあ、俺は誕生日を来ちゃったよ」  
バックニア「まさか、エステル・シィリヴレンはこのエルフの命をもってして作られた剣・・・？なんて思っているもおくびにも出さないんだな」  
マスター「という事もすっかり忘れかけてる(笑)」  
バックニア「今日は南の畑を耕しにいくぞお。こらあ、オーウェン<sup>15</sup>、まてえ〜」  
マスター「グウェウだっつうの(笑)」  
ファラシオン「そういえば、記憶を辿っていたんだがサウロンはこの時代でも結構人間にちょっかいを出していて、戦争も起こっているんだよな。」  
マスター「まあね。実際戦争が起こっているのは事実だが、この国はサウロンにはあまり狙われていない。ということである日、アラゴス王が非常に嬉しそうにしている」  
バックニア「陛下、どうされました？」  
アラゴス「うむ、明後日はシィリヴレンの100歳の誕生日なのだ。見てくれ、このような贈り物を用意したのだ」  
マスター「と、アラゴス王は指輪を見せてくれた」  
一同「ほーう・・・」  
ファラシオン「知識ロールしていい？」  
マスター「いいけど、しても無駄」  
アラゴス「これを渡してプロポーズするつもりなのだ」  
バックニア「やるじゃないですか!ところで彼女とはどういう馴れ初めで、普通のエルフじゃないでしょう。」  
アラゴス「うむ、私が狩りをしている時にー」  
バックニア「仕掛けた罠にはまっていた?(笑)」  
マスター「森の動物を殺してはダメですう〜的な出会いでいい？」  
ファラシオン「投げやりだなあ」  
マスター「よく考えたら俺が少しも照れる必要ないじゃん(笑)」

マスター「さて、せっかくだから君たちはアラゴス王に随行してエルフの里に向かった。」

<sup>15</sup> マイケル・オーウェン。イングランドのトップストライカー。現実の実力も相当だが、PSゲーム『ウィニングイレブン』で悩まされた人の方がよっぽど多い



---

バッカニア「俺らよそ者の割りにかわいがられているなあ、悪い予感がするよ。今後の展開に。」  
フドーリン「ただの見世物だがな」  
マスター「ところが、エルフの里は凄いい厳戒態勢になっている」  
バッカニア「そっか、エルフの娘をもらいに行くんだもんな。ここは仲介人として灰色港のファラシオンに一役立ってもらうのはいかがでしょうか？陛下？」  
ファラシオン「そうだな。アラゴス王についていくことにしよう」  
マスター「エルフの里の入り口についた。しかし、エルフの里の長老と思われる人物が立っていて『悪いが娘との結婚は諦めてくれ』」  
ファラシオン「な、なんと!？」  
マスター「『エルフと人間が一緒になっても不幸になるだけだ。私は娘が不幸になるのを放っておくことは出来ん。この話はなかった事にしてくれ』と言われた」  
アラゴス「私はシィリヴレンを愛しているんです!」  
マスター「『無理だ。とつとと』あ、とつととじゃない(笑)『潔く国に帰って人間の娘と結ばれるが良い』」  
フドーリン「とつとと尻尾巻いて逃げなー(笑)」  
バッカニア「ファラシオン、出番だ!何か言ってやれ」  
ファラシオン「まあ、よくあることである(笑)」  
バッカニア「お前、そんな事でどうするよ!？」  
マスター「アラゴスはつかみかからんとするが、周りの者に止められてお城に帰ろうとしている」  
ファラシオン「えーと、エルフの長よ。なんて名前？」  
フドーリン「ガラドリアル!(笑)」  
マスター「え、えーと、シ、シルヴ・・・シィルヴェンドにしようか」  
バッカニア「えーと、ファラシオン、何本読んでるんだよ・・・」  
ファラシオン「いや、過去の事例を探している」  
マスター「やめてやめてやめてやめてやめてやめて(笑)まあ、『それはたまたまだ!』って言うけど(笑)」  
バッカニア「なんか法廷になってきたなあ・・・」

マスター「さて、お城に帰ってきた」  
バッカニア「まあ、気を落とすなよ、王様・・・」  
アラゴス「放っておいてくれないか!」  
マスター「と言って自室にこもってしまった。」  
バッカニア「一回断られた位でスネてるんじゃないよ。何度でもアタックすればいいじゃないですか」  
ファラシオン「・・・(本を見ながら) エアレンディルはエダインのトゥオルとゴンドリエルのイドリルとの間に生まれたではないか!(笑)<sup>16</sup>」  
バッカニア「今更帰ってきて言うなよ～(笑)それさっき言えよさっき!」  
ファラシオン「見つからなかったんだよ!(笑)」  
フドーリン「ようやく今思い出したんだな」  
マスター「さて、そうした感じで引きこもってしまって、食事もマトモに食べなくなった」  
ファラシオン「恋の病は重いぞ～」

あの手この手で連れ出そう、何とかしようとするが・・・

ファラシオン「そうだ、指輪!せめて指輪だけでも届けてあげないか?」  
アラゴス「放っておいてくれないか。」

---

<sup>16</sup> エアレンディルはフオルの息子トゥオルと、ゴンドリンの王トゥアゴンの娘イドリルとの子であり、息子にエルロンドとエルロスがいる。またしても便利な Wikipedia

---

ファラシオン「じゃ、ほっとこう。余計な事はしない方がいい。」

マスター「マスターが言ったわけじゃないからね(笑)」

マスター「さて、数日後。一人の魔法使いが現れて『このままでは王様の健康を損なってしまふ。私が話してみましよう』と言ってやってきた」

バックニア「よそ者の俺らが言うのもなんだけど、なんかこいつうさんくさくない？」

ファラシオン「お主名前は何と言う？」

マスター「『ロウリスと言う・・・』と言う事で、話を聞きだして食事を食べるようにはなってきた。」

バックニア「しかし言動がおかしくなってきた」

マスター「その通り」

バックニア「サウロンっていいよねえ～、って言い出すとか(笑)」

ファラシオン「セオデン王みたいに？」

マスター「セオデン王はなくなる方向だったが、その逆。目に異様な光が満ちてきた。そんなある日、君たちがグウェウと遊んでいると王の部屋の扉がバタンと開き、」

アラゴス「出撃の用意をせよ！」

ファラシオン「はあ！？」

フドーリン「きこえんなあ～～？(笑)<sup>17</sup>」

マスター「お前らに言ったわけじゃないっつうの！(笑)」

アラゴス「奪えばよいのだ！！」

フドーリン「なぬう！？」

マスター「あれよあれよと言う間に舞台が編成され、エルフの里へ進撃しました！」

## 第5章 プレイヤー置いてけぼりで進行する悲劇

バックニア「なにいいいいいー！！それはまずい！止めろ止めろ！！」

ファラシオン「魔法使いの姿を探すよ？」

マスター「もういなくなってる」

バックニア「だってもうロールもさせてくれないんだもん。」

マスター「さて、君たちはどうする？」

バックニア「王様を眠らせちゃえ！とりあえず指示が出せないようにして・・・」

フドーリン「俺らはこの国にはいられなくなるけどな。まあいいか」

バックニア「元々この国の人間じゃないんだからいいんだよ。」

グウェウ「お兄様はどうしちゃったんですか！？」

バックニア「そうか、兄貴を行動不能にして、弟を仕立てればいいのか。」

ファラシオン「魔法かけていい？<暗示>！」

バックニア「軍を退くのです。軍を退くのです。軍を退くのです。軍を退くのです・・・(笑)」

ファラシオンは魔法によってアラゴスを正気に戻そうとしているわけでもない（<暗示>ってアンタ）が、何とかしようとしたが・・・

---

<sup>17</sup> 『北斗の拳』よりウイグル獄長。俺に探せない元ネタはない。



---

アラゴス「邪魔をするな！」

マスター「バシンと跳ね返された。端的に言うとなンダルフのようにはいかなかった(笑)」

ファラシオン「なんだこれは一体？まさかあの魔法使いは・・・！」

バックニア「サウロンに心を売ったのか！？」

マスター「さて、どうする？」

バックニア「え？そりゃあ、何とかするさ、止めさせられないのか？」

ファラシオン「魔法は効かなかったし」

バックニア「閉じ込めるとか」

ファラシオン「王様に危害を加えようとしたらタコ殴りだろ？」

バックニア「良識のある人間を説得すれば・・・グウェウに挙兵をやめさせるわけには？」

フドーリン「いや、もうダメだろう。我々に出来る事はないのでは？」

バックニア「エルフの里に先回りするしかないかな。迎え撃つように言う？」

フドーリン「火に油を注ぐだけだと思うが」

ファラシオン「先回りしてエルフの村に向かおう。3人だから早く着くよな(笑)」

マスター「うん。着いたよ」

エルフ「たかがシルヴァンが何の用だ！？」

ファラシオン「・・・ちょっとコンプレックスにさいなまれてる(笑)」

バックニア「いいから、後でやってくれ(笑)」

ファラシオン「シィリヴレン様に会わせてくれ！危険が迫っているのだ！！」

エルフ「シィリヴレン様は我々の族長の娘だぞ、お前のようなたかがシルヴァンに会わせるわけにはいかない！」

ファラシオン「コンプレックスにさいなまれる(笑)・・・あ、うあ・・・あう」

バックニア「そこをなんとか」

ファラシオン「危険な人間の軍勢が迫っているのだ、シィリヴレンを取り返しに来るのだ！それを注進に参った」

エルフ「何？」

ファラシオン「シィリヴレン様がダメなら族長殿でもいい！」

ここで、<交渉と影響力>のロールを行う。結果は・・・

エルフ「ならん、ならん！！(笑)」

バックニア「こんな事をしている間にも奴らが来ているのに！」

ファラシオン「悪い魔法使いに操られているのだ！」

エルフ「何を世迷い事を・・・証拠はあるのか？」

ファラシオン「・・・」

バックニア「直にわかる！<sup>18</sup>」

エルフ「・・・お主等の言う事には少しも真実が感じられん。」

ファラシオン「だって、ホントなんだもん！！(笑)」

フドーリン「グウェウを連れて来れば良かったか・・・？」

バックニア「どうにもならんだらう。あまり意味はないような。」

ファラシオン「知らなかったらおしまいだしな」

バックニア「とにかく、エルフの王女さまに会わせてくれ！」

エルフ「だから、ならんと言っておる！！」

---

<sup>18</sup> その時には手遅れなんじゃあ・・・

バックニア「と言っていると、矢が刺さったりして、倒れて、『しまった！もう来てしまったか』とか(笑)」  
マスター「そうするか(笑)・・・ドドドドと言う馬鳴りが聞こえてきた」  
バックニア「まさか本当に！」「だから言ったじゃないか！」  
エルフ「まさか本当に！」  
バックニア「だから言ったじゃないか！(笑)二度も言わせるなよ！(笑)」  
エルフ「攻めて来たぞ！！応戦しろ！！人間に負けるなーーーー！！！」  
ファラシオン「待て待て待てーーーー(笑)！？応戦、アラゴスは悪い魔法使いに操られてるだけなんだ！話し合えばわかるはずだ！」  
エルフ「そんな暇はない！！」  
マスター「聞く耳持たず。ほとんど人間側の奇襲作戦になってしまい、多くのエルフが命を落とし、エルフの里は半ば壊滅状態になってしまった。族長の一部の人を残して。」  
バックニア「どうするファラシオン？」  
ファラシオン「うーーーーむ・・・」  
マスター「で今虐殺中って感じなんだけど」  
バックニア「止めろ止めろ！！(笑)」  
マスター「勝敗の決まったあとの戦争なんて虐殺以外何物でもないでしょ」  
フドーリン「虐殺はやめさせようかな・・・？」  
ファラシオン「アラゴス王！！アラゴス王の前に飛び出すよ」  
アラゴス「邪魔だ。」  
バックニア「うーん、こうなったら・・・どうしよう？」  
マスター「アラゴス王はうわ言のように「シィリヴレン、シィリヴレン」と呟きながら族長の館に向かっている」  
バックニア「どうするよ・・・？」  
ファラシオン「魔法も効かねえしなあ。」  
マスター「そうすると、族長の館の扉が開き、シィリヴレンが現れた」  
アラゴス「シィリヴレン、さあ結婚しよう・・・。お前のためにこれほど多くのエルフを殺したのだ」  
シィリヴレン「なんて事を・・・最早貴方とともに歩むことはできません！さようなら・・・」  
マスター「と自害した。持っていたナイフで自分の胸を刺した」  
一同「ああ~~~~~っ！」  
マスター「シィリヴレンの遺体を抱き、慟哭をしている」  
ファラシオン「これは貴方が選んだ道なのだ」  
アラゴス「・・・・・・・・・・・・・・・・・・いや、全てはエルフだ！エルフが悪いのだ。エルフが悪いのだ。エルフという種族さえいなければあああ！」  
ファラシオン「ビクウウウッ！(笑)逃げる」  
マスター「君は生命の危険を感じた」  
フドーリン「やるか、アラゴス？」  
マスター「アラゴスはそのま—まあファラシオンはいなくなったからいいけど一次々とエルフを殺していった「エルフが憎い！エルフが悪い！！」」  
バックニア「アラゴスううう・・・」  
マスター「君たちの側に兵士が現れた」  
兵士「私たちはグウェウ様の配下の者です。とりあえずこの場は危ないですから一度王国に戻ってください」  
ファラシオン「わかった。」  
バックニア「シルヴァンの遺体はどうするんだ？あとで可哀相だからあとで一緒に埋葬してやろうと思うんだけど」

---

ファラシオン「そうだな。」

マスター「さて、エルフの里にいたエルフはほぼ全滅しかかっている」

バックニア「弱すぎ・・・」

マスター「奇襲だしね。それに、明らかに闇の力が働いている事に気がついた」

ファラシオン「なんだよ！くそう！止められなかった・・・！」

マスター「アラゴス王の持っていた剣から闇の力を感じるわけだ」

ファラシオン「それって黒い剣か？」

マスター「黒くない」

ファラシオン「この期に及んではもうアラゴス王を倒すしかないのか？」

バックニア「そうだな。このまま勢いを増して他の国に攻め込んだりしない内に奴を倒すしか無かろう」

ファラシオン「でも一回退けて言われたから退こうか。」

バックニア「とりあえず国に戻ろう。グウェウが心配だしな。」

ファラシオン「戻って守りを固めよう」

マスター「さて、君らが戻るとアラゴス王も帰ってきた」

ファラシオン「門閉めてるよ」

マスター「なぜお前が(笑)」

ファラシオン「グウェウに頼んで閉めてもらっているんだよ。」

グウェウ「優しかったお兄様に戻って欲しいんです」

バックニア「いや！アラゴス王は乱心した！闇の勢力に心を売り払ったのだ！」

グウェウ「そんな・・・泣」

マスター「という言葉もむなしく響き、アラゴス王とその軍隊」

アラゴス「門を開けろ！！」

フドーリン「シーン・・・」

ファラシオン「アラゴス王の手持ちの軍勢と城内の軍勢はどちらが多い？」

マスター「・・・手持ち」

バックニア「そりゃそうだろうな。」

アラゴス王「まあ良い。我はエルフを殺し続けるだけよ」

マスター「と言って、去ろうとしている」

ファラシオン「兵士たちよ！！！！(笑)王の言葉を聴いたか！最早王の目的はエルフを殺し続けるだけ、お前たちもそれに加担しようと言うのか！！」

マスター「ところが、アラゴス配下の兵士たちも、目には狂気の光が宿っている」

バックニア「どお～？」

ファラシオン「マジかよ！？」

バックニア「城内の兵士たちは我々の言う事は信用してくれるのかな？アラゴス王の方が正しいとは思わないのかな？」

マスター「そりゃ、グウェウもいるしね。」

ファラシオン「アラゴス王はエルフを殺める事で闇の世界に堕ちてしまったのか。トリガーになってしまったんだ」

バックニア「じゃあ俺もお前を殺せばなるかな？」

ファラシオン「なるんじゃない？」

フドーリン「なるかなあ！？(ウキウキ)(笑)」

---

---

## 第6章 黒い剣と白い剣が生まれた理由

バックニア「何とか奴の動きを封じる、正気に戻す方法はないものかなあ？」

ファラシオン「しかし、ここがどこかもわかっていない今の状態(笑)・・・アラゴス王！！」

アラゴス王「何だ？」

ファラシオン「アラゴス王一人なら入ってもいいぞ！！(笑)いや、供の者5人までなら許す！(笑)」

フドーリン「なんて頭いいんだ・・・(笑)」

アラゴス王「(君の悪い顔でニヤリと笑って) 我が城にエルフはいないからなあ。」

バックニア「エルフここにいるぞお！？(笑)お前の大事な城の中に小汚ねえエルフがいるんだぞ！」

ファラシオン「ここで人間の女を犯してエルフを一杯産んでやるう！！(笑)<sup>19</sup>」

バックニア「それいいのか、今のセリフ。撤回するなら今のうちだぞ。そんな事してシルヴァ・・・名前が思いだせん！」

ファラシオン「シリヴレン」

バックニア「シリヴレンが喜ぶと思うのかあ！コンチクショー！」

ファラシオン「シリウレンが泣いているぞお！ガバッ」

バックニア「ガバッって何？」

ファラシオン「近くの女の子に(笑)やる事がなくなってきた」

アラゴス「うるさくさえずる虫共だ・・・よかろう」

バックニア「よし、来た！」

ということで、アラゴス王はパーティのいる所に近づいてきた。戦闘に突入？

アラゴス「お前たちを殺せば良いのだな・・・？」

バックニア「いや、違うぞ。殺すのはエルフだけだ」

ファラシオン「いやいや、お前の相手はこいつ(フドーリン)がやる(笑)」

フドーリン「ええーっ？」

アラゴス「・・・ついでにお主等を殺してやればよいのだ」

バックニア「ついでですかー？」

ファラシオン「異常変形し始めるとか」

フドーリン「その時には俺もするから。」

イニシアチブを行う。アラゴス王はそれほど早くなく、PCが先手を取る事が出来た。まずはフドーリンの一撃。20点のダメージと痛打

マスター「胸に軽傷、片足への一撃で骨を折る」

バックニア「目を覚ませアラゴス王(お前がやったんじゃないだろうに・・・)」

アラゴス「小癪な！」

アラゴス王の反撃。フドーリンへの一撃だが、手負いながらも

マスター「側頭部に当たって6時間気絶。」

バックニア「一撃かよ！？クマー撃？」

ファラシオン「く、クマーーーーーー！」

バックニア「目を覚ませアラゴス王！貴様がー」

フドーリン「目を覚ませフドーリン！だな(笑)」

---

<sup>19</sup> いや、それはマズいだろ、いろいろな意味で。



---

ファラシオンは呪文準備をし、バッカニアは回避に専念する。次のラウンドになりファラシオンが魔法を唱える。

ファラシオン「<友愛>。」

マスター「・・・まだやるのか？」

ファラシオン「効かないってことか・・・(笑)」

気合を入れてサイコロを振るが、効果はなし。そもそもサイコロの目が良くない

ファラシオン「おかしい!(笑)」

続いてアラゴス王はエルフであるファラシオンへ攻撃をかける。ファラシオン人生最大のピンチ。

バッカニア「死なないでくれ、ファラシオン!!」

ファラシオン「全滅だぁ～！」

ファラシオンは致命傷を負い、おまけに1ラウンド麻痺。と思ったが・・・

マスター「あ、ゴメンゴメン。片足引きずっているんだった。はずれで。」

バッカニア「よし、俺の番だな。アラゴス王!この指輪は偽物なのかぁ!？」

アラゴス「・・・フン」

バッカニア「あ!無視された、次から攻撃する!もうむかつく!堪忍袋の尾は切れるためにあるんだ!」

ファラシオン「イニシアチブだぁ～!(笑)」

アラゴス王がイニシアチブを獲得し、ファラシオンへ攻撃する。

アラゴス「お前がエルフだった事が不幸の始まりだ。」

ファラシオン「実はボクエルフじゃないんですぅ～(笑)」

ファラシオンの叫びも空しく、ちゃんと致命傷の13点のダメージを受ける。1ラウンドの麻痺となる

ファラシオン「呪文準備が解けた。さよなら・・・」

バッカニア「この分からず屋～!!!」

との言葉と共にバッカニアの一撃。28点のダメージを与え、痛打による麻痺を加え、更にもう一撃を加える。これが無限ロールとなり、必殺の一撃になる。

マスター「側頭部に当たって6時間気絶」

一同「よっしゃあああああ!」

フドーリン「これで6時間と3ターン!俺は早く起きれるということだね(笑)」

バッカニア「変移抜刀、バッカニア斬り!」

マスター「ところが、そうもいかないんだな。」

バッカニア「なにぃーーー!？」

ファラシオン「闇の勢力だからな」

マスター「気絶どころか致命の一撃だったんだが、王は最早人ではなくなりつつある」

ファラシオン「首が変な方向に曲がったまま攻撃してくるとか」

バッカニア「あ・あ・あああああ・・・(笑)」

マスター「アラゴス王の体は明らかに人間のものではなくなっている。片足も折れているしー」

ファラシオン「首も変な方向に曲がっているしね(笑)」

---

アラゴス「例え我が人の体を失ってもエルフを憎む・・・この体エルフを呪う剣となって未来永劫エルフを地獄に叩き落とし続けようぞ！！」

マスター「と言うと、アラゴス王は黒い剣になった」

バックニア「見た事のある黒い剣だね」

ファラシオン「俺はもう背筋がゾーッとして動けなくなっている」

バックニア「まさか、あの黒い剣にこんな由来があったとは・・・」

このような一連の事件から黒い剣『アラゴスの剣』は誕生した

マスター「あまりの事にみんなビックリしている。まだアラゴスの怨嗟の音が聞こえてくるようだ」

バックニア「こんな悲しい事件があったとは・・・せめてシリヴレンの側に埋めてやるか」

ファラシオン「シリヴレンの遺体はどうなっている？」

バックニア「白い剣になっている？」

マスター「な、なんで？なにがあったの、なるわけないじゃん（汗）」

バックニア「外の兵士たちはどうなっている？」

ファラシオン「呪縛が解けた？」

マスター「解けた？」

バックニア「我々は一体ー」

マスター「そんなもんじゃないよ、エルフを虐殺したんだから」

バックニア「俺たちはなんてことをしてしまったんだ～ガクガク(((( ;° 旦°))))ブルブル」

マスター「ということでこの王国は・・・当面のところ、グウェウがいるから問題はないが若いし、アラゴス王の力でもっているような所もあったので、1週間ほどで攻めてきた。どうする？」

ファラシオン「うーーん、軍勢はどんくらい？」

マスター「勝てなさそう(笑)」

ファラシオン「逃げるしかないじゃん」

グウェウ「逃げるしかなさそうです。いつかきっと王国を蘇らせますから」

マスター「その際、アラゴス王に従っていた騎士達の必死の働きで君たちは難を逃れた」

ファラシオン「グウェウに従っていくしかなかろう」

バックニア「この時代でこんなのにのんびりしているわけにもいかないんだがなあ」

ファラシオン「のんびりしているわけではないが・・・」

フドーリン「動乱の時代を生きているんだよ(笑)」

マスター「グウェウと共に西に逃れていったが、エルフ達の一行が現れた」

バックニア「やべ！」

フドーリン「黒い剣はどうなったの？」

マスター「ああ、それを聞いてなかった。それはどうする？」

フドーリン「遺体と黒い剣は持っていこう」

バックニア「エルフの里と一緒に埋めてやりたいいな。エルフの里に埋めた。封印した」

マスター「封印したの？」

ファラシオン「こんなおつかねえ剣いらねえ。」

ファラシオン「エルフに出会うのはその後」

マスター「その後。ということで。君たちはエルフの一団に遭遇した。」

ファラシオン「何エルフ？」

マスター「ノルドール」

ファラシオン「どんだけいんだよ～！」

---

マスター「エルフの里の生き残りだからね。」

バックニア「びく！！！」

ファラシオン「私は止めに入ったぞ！」

フドーリン「だから、言ったじゃないか！！」

エルフの長「もういいのです。不幸な出来事がありました」

フドーリン「あれを不幸な出来事にしちゃったよ・・・」

マスター「寿命が長いからね(笑)」

ファラシオン「ノルドールの驕りが招いた事」

エルフの長「ただ、今の問題はアラゴス王の怨念による黒い剣、いずれ闇の者の手によって黒い剣は使われてしまうでしょう。」

ファラシオン「どうしたらいいんだろう・・・？」

マスター「そこで、会合が持たれて、グウェウが提案した」

グウェウ「だったらそれに対抗する剣を作れば・・・？」

一同「そうだそうだ～」

フドーリン「誰？おれら？(笑)」

マスター「そこでだ、エルフが黒い剣に対抗する剣を作り、グウェウの一族でそれを使う人を育てましょう。ということになった。」

バックニア「ほお～、なるほど」

マスター「この誓いの証として紋章が作られた。見覚えがあるんだけど・・・」

ファラシオン「ま、まさか・・・」

バックニア「額に肉？(笑)」

ファラシオン「お前の事だぞ！！！！(笑)」

バックニア「ホントだ！この紋章は間違いなく俺たち一族の—アアアアアア！！(笑)」

マスター「そしてそのままグウェウの一族は南に向かっていった。」

ファラシオン「俺たちはどうなるの？」

マスター「ファラシオンがエルフという事で、エルフが剣を作成するのを見届けていただきたい、ということになった」

ファラシオン「うむ。何が出来るか・・・」

フドーリン「俺まだ産まれてもないのね。」

マスター「そして、廃墟となったエルフの里に一月程滞在することになった。」

フドーリン「また一月・・・(笑)」

ファラシオン「あとは黒い剣をどうにかしたいのだが・・・」

マスター「ところが、黒い剣を発掘しようとしたら、もう無かった。残っているのはシィリヴレンの遺体だけ。」

ファラシオン「ええ～！あ・・・ああ・・・ああ・・・あ。足跡追跡だあ～！！」

マスター「いいけど、結構。日が経ってるんだぞ。ということで、君たちは意気消沈してエルフの里に戻ってきた。」

一同「(・ω・)シヨポー」

マスター「シィリヴレンの遺体も持ってきた。ところが、そっから先が一捻りあるんだけど、中々黒い剣に対抗する武器ができない。」

ファラシオン「できるって言ったじゃないかあ～」

マスター「そこまでの黒い剣の怨念に対抗することが・・・」

バックニア「あそこまでの怨念がそうポコポコできるかあ～ッ！！！」

フドーリン「切れた(笑)」

---

バックニア「元はと言えばお前らが強情張ったのが悪いんだろ？」  
ファラシオン「そうだそうだ！」  
マスター「エルフの鍛冶師は非常に悩んでいます。シルヴァレンと言う名前なんだけど」  
ファラシオン「何か必要な物があれば取ってきてやろう」  
バックニア「何が足りないんだろ？ダイスが足りないのか？魔法力が足りないのか？エルフを殺すという怨念だ。」  
シルヴァレン「答えは出ているのだ。答えは出ているのだよ・・・」  
バックニア「それは君の命！(笑)」  
シルヴァレン「その通り」  
バックニア「(ファラシオンを指して)ここにいいのがあるじゃないですか(笑)」  
シルヴァレン「それもシリヴレンの血に繋がる者がいい」  
バックニア「そりゃ無理だよ」  
マスター「ところが、血筋的に族長の遠縁が残っているんですよ。そこで、エルフの者たちは恐ろしい決断をする事になる」  
ファラシオン「わーお！僕はしががないシンダールですから(笑)」  
マスター「遠縁にケレブリウという娘がいるんだけど、彼女がその身を捧げる事になりました」  
ファラシオン「その人とは会えるのかな？」  
マスター「会えるよ。遠くから見ると(前々回死んだ)アリオンの似ている」  
ファラシオン「あれはアリオン！？家系からして犠牲になる運命だったのか？」  
ケレブリウ「私はケレブリウですわ」  
ファラシオン「実は俺アリオンに恋心を抱いていた。今更気づいたが(笑)「ケレブリウ殿、本当に貴方はそれでいいのか？」」  
ケレブリウ「それがエルフ達の為になるですから」  
マスター「ところが『それは嫌だ！』とエルフの中で反対する者もいた。シンダールエルフのファラシオン」  
ファラシオン「！？」  
バックニア「ファラシオンという名前のシンダールエルフ？ここにいるじゃないか！」  
マスター「しかも、ファラシオンと似ている。」  
フドーリン「ファ、ファラシオン！と言ってみる！」  
マスター「二人共振り向く(笑)」  
ファラシオン「私がファラシオンだ」  
ファラシオン(過去)「私もファラシオンだ！」  
ファラシオン「私は灰色港のファラシオンだ！」  
ファラシオン(過去)「私もこれから灰色港に行くところだ(笑)」  
ファラシオン「で、そいつが嫌だって言ってるのね」  
バックニア「ファラシオン、そんな昔からいたの？」  
ファラシオン「いや、多分先祖だ。大ファラシオン、小ファラシオン(笑)」  
マスター「さて・・・どっちのファラシオンも抵抗するんだが、どうしようもないと言う事で・・・」  
ファラシオン「今回どうしようもない事が多すぎる!!!(笑)」  
フドーリン「何もしないままにどんどん話が進んでいく(笑)」  
バックニア「濁流に飲まれるように話が進んでいく(笑)」  
マスター「さて、そのエルフの娘が犠牲となり、白い剣が完成した」  
バックニア「早ッ!!」  
ファラシオン「アリオーーーーン!!」  
マスター「そしてその剣は『エステル・シリヴレン』という名前を付けられた。」

バックニア「やっぱり」  
フドーリン「俺たちはなんて無力だったんだ・・・」  
シルヴァレン「その代わり私達の一族は名前を失い、エルフの歴史から消えて、白い剣を守っていこう」  
マスター「と言って去っていった。そして大ファラシオンは涙にくれていたんだけど『ファラシオン、君が証人になってくれ』と言い残して、灰色港に去っていった。」  
フドーリン「ちえ、俺のご先祖でねえや(笑)」  
マスター「出したかったんだけど、繋がらなかった。ゴメン」  
バックニア「どうでもいいけど、俺たち還れるのかなあ・・・」  
マスター「ということを心配していると、まばゆい光が(笑)」  
ファラシオン「手抜きだ！手抜きがあ～！」  
マスター「そして、現代に戻っていく・・・君たちの意識の中にアリオンの声が聞こえた」  
ファラシオン「おお、愛しのアリオン！！」  
アリオン「思い出して頂けたのですね。ファラシオン様。」  
ファラシオン「もちろんだ、お前の事を忘れたことなど・・・ちょっと待って(笑)」  
アリオン「こうして、黒い剣と白い剣ができたのです」  
バックニア「今回俺は何も出来なかったよ」  
フドーリン「6時間寝ているだけだった(笑)」  
マスター「そして黒い剣と白い剣は第二紀の戦争で使われ、黒い剣と白い剣は戦い、時の彼方に封じられた。サウロンが倒れたことで白い剣も勝利したんだけど、いつかまた黒い剣が還ってくるだろうということで、白い剣もまた封印された。ということをアリオンも説明してくれた。」  
バックニア「そうか、それでそれをこないだ解きに言ったんだな。」  
ファラシオン「そうだったのか。で俺たちはどこに？」  
バックニア「時空移動中？」  
フドーリン「そこらへんに時計のマークがついているから。「定員オーバーだよ！！！」(笑)<sup>20</sup>」  
マスター「さて、現代に帰還するが、ちょっとだけ続く。」

## 第7章 ごめんね。やっと好きにしてよくなるよ

マスター「還ってきた。最後にアリオンが『あとよろしくお願いします』と。体力は全部は回復している。持ち物もそのまま」  
フドーリン「服は？」  
マスター「だって元々着てなかったんでしょ？(笑)」  
フドーリン「着てたよ！！(笑)」  
マスター「で、場所なんだが、どこかの廃墟に倒れている。どこにいるのかはわからない」  
バックニア「何だこの廃墟？」  
フドーリン「見覚えはない？」  
マスター「ない。で、知覚ロールをしてくれ」

<sup>20</sup> やはり時空移動と言えば、これが定番。図は定員オーバーの図。



---

一行はここで知覚ロールを行う。

マスター「ちなみに、手元に黒い剣と白い剣はある。」

ファラシオン「あれえ！？・・・紋章は？」

マスター「力を失っているが、あるよ。」

ファラシオン「あるのか」

マスター「で、いきなりで悪いんだけど 15 点のダメージ。で毎ラウンド打撃 3。太股に矢が刺さっている」

ファラシオン「バラール！！」

フドーリン「バラァァァァァアル！！！」

バラール「全てを知って戻ってきたか。黒い剣を渡してもらおう」

バッカニア「やなこった！」

ファラシオン「サウロンに身も心も売ったな！！貴様だけは許さん！よくも師匠を！！(笑)」

バッカニア「師匠殺したのお前やん(笑)」

マスター「と言いながら呪文リストを探しているのな(笑)」

フドーリン「バラールはどこにいるの？」

マスター「少し高い所。走れば届くよ」

フドーリン「不意打ちとは卑怯なバラール！！」

バラール「お前たちのように騎士道精神は持ち合わせてはいないのでな」

ファラシオン「エルフ精神だ」

フドーリン「俺は熊精神だ」

バッカニア「俺は・・・？(笑)南寇魂ってやつだ」

バラール「我々は戦う事で証明するのみだ！いくぞ！」

マスター「とバラールが言うとバラールの横からウルク・ハイが 2 匹、フードを被った謎の人物が一人現れた。」

バッカニア「フドーリン、バラールを頼むぞ。俺はあの変な奴をやる！」

フドーリン「言われなくてもバラール以外は目に入っていないんだがな！」

ということでイニシアチブ。最初に獲得したファラシオンは呪文準備で終了。戦士二人はイニシアチブが遅く、何も出来ない。ウルク・ハイ 2 匹はバッカニアに接近し、謎の男が

マスター「ファラシオンに攻撃。鞭。」

ファラシオン「鞭！？」

ピシ、と 5 点のダメージを与える

バッカニア「ああ、もっと！(笑)」

続いてフドーリンはバラールと共に接敵して終了。バッカニアは接近してきたウルク・ハイに対して攻撃をしかける。23 点のダメージを与えて、痛打。

マスター「武器を持った腕に斬りつけた。1 ラウンド麻痺、さらに腕を焼いた煙で一時的に目が見えなくなる。麻痺が更に累積」

続いて次のラウンド。バッカニアの太股の傷の出血は止まらない。止めない。まずはファラシオンはウルク・ハイ 2 匹に対し＜痺れ雲＞を放つ。2 匹とも

マスター「閃光が走る。1 ラウンド麻痺。高い目出した方がいいべ。」

---

ファラシオン「俺も出したいよ！！でも大丈夫。動かないから次もだな」

続いてフドーリンがバラールに攻撃し、37点のダメージを与える。ダメージは高いが痛打がなく、何故か麻痺も乗らない。バックニアは麻痺の累積が少なく、すぐ回復してしまうウルク・ハイへと攻撃を行い、22点のダメージを与える。しかし、痛打の目がふるわない。麻痺も累積をしなかった。

マスター「じゃあ、バラールも番ね。フドーリンに弓を撃つよ」

フドーリン「ファンブルを起こすがいいさ〜」

しかし目が振るわない。11点と軽傷。太股に傷を与えて終了。そして最後に謎の男へのファラシオンの攻撃だが・・・

マスター「もお〜っ！低いよ！5点のダメージ」

フドーリン「おっけえ、ちゃっちゃと終わらせようぜ。」

次のラウンドになりまずはウルク・ハイ 2匹への＜痺れ雲＞の効果が継続。

マスター「激しく帯電！打撃+9、行動力-10、3ラウンド麻痺」

ファラシオン「キタ————(°▽°)————ッ!!」

しかしもう1匹は閃光が走って麻痺で終了。バラールの手番は剣に持ち替えて終了。続いてバックニア

バックニア「じゃあさっきと同じオークに攻撃だね・・・03はファンブル？」

マスター「ファンブルだね・・・(ダイスを振る)手が滑る。このラウンドはもう何もできない」

バックニア「あだだだだだ・・・」

続いてのフドーリンはバラールへの攻撃！目が走る！

マスター「60点のダメージでバラールはー」

フドーリン「息絶えた？」

マスター「気絶・・・していない。観念した。」

フドーリン「観念する前に切りの痛打が23(笑)」

ファラシオン「容赦ねえ〜(笑)」

マスター「さて、謎の男が最後にファラシオンに攻撃する・・・(低い)・・・4点」

このままラウンドは進み、＜痺れ雲＞効果。1匹目のウルク・ハイに対しては麻痺すら乗らなかったが、もう1匹に対しては気絶をさせた。更に、ファラシオンの手番にそのままなり、謎の男に対して＜光弾＞を放つ。「軽く帯電」と大したダメージを与えなかったが・・・

マスター「ちょっと不自然だなと思うんだけど、ダメージを与えた時にフードがはがれて、顔が見えるようになった」

バックニア「見覚えはある？」

マスター「ある。第1章に出てきたア Ril。」

ファラシオン「お前は！！・・・ア Rilか。死んだはずでは？」

マスター「虚ろな目をして鞭を振るってきた」

バックニア「死人か・・・」

マスター「そしてバラールなんだが、片足千切れて息も絶え絶えだが」

バラール「そういうことだ。何度殺しても我々は蘇る・・・何故なら力をお借りしたからなあ。この力

---

を！！」

マスター「と言うと、バラールは懐から指輪を取り出して、はめた。するとー」

フドーリン「消えた？」

マスター「消えない消えない。ロールして。ファラシオンならわかるかも」

ファラシオン「(サイコロを振る)」

マスター「人間に送られた9つの指輪の1つ」

ファラシオン「9つの指輪の一つだ！！」

フドーリン「なにぃーっ！それが一体なんだがさっぱりわからん！！(笑)」

マスター「すると、バラールの体の肉が崩れて冷たい冷気が増し・・最後はナズグルと化した」

バックニア「ナズグルう〜・・・ががががががが」

フドーリン「地に堕ちたな！バラール！！」

ファラシオン「お前はもはや人間ではない！当たり前だ！」

バラール「貴様らがそうさせたのだよ、私を！！例え地に堕ちても私は貴様らを殺す！」

フドーリン「笑止！！」

バラール「だが・・・今回はやる事がある」

フドーリン「逃げる気がバラール！」

バラール「何とでも言え」

マスター「すると、空から大きな獣が降りてきて、君たちを威嚇している間に、バラールは黒い剣を奪いー」

バックニア「ええ〜っ！なんか強引じゃない、今回？」

ファラシオン「すげえ強引だな」

マスター「判定させていないけど、本当は恐怖ロールをするんだよ。あと前半はカンベンしてくれ。起こった話をしなけりゃならなかったから」

ファラシオン「あぁー。」

バックニア「しまった、黒い剣が！(笑)」

ファラシオン「なんだよ、またかよ！！(笑)」

バラール「元々は我々のものだからな」

バックニア「貴様が使ったってロクな事にならないんだから」

バラール「ならば追ってくるがいい」

マスター「と言うと、空飛ぶ獣に乗って飛び立とうとする」

フドーリン「ダガーを投げるよ」

ファラシオン「俺も弓を撃つよ」

バックニア「俺も白い剣を投げる(笑)」

必死の攻撃だが、空しいだけだった。唯一フドーリンのダガーだけが刺さったが、ナズグルに通常の武器など効かず、崩れ去った。

バラール「次にあったとき、この借りは返させてもらう」

ファラシオン「今返せー！！！(笑)」

バラール「楽しみは後にとっておくものだ」

マスター「というとバラールは去っていった」

ファラシオン「足が砕けたからって逃げやがって(笑)」

マスター「君達はバラールがナズグルに変化した事、あとあまりに強引なマスタリングに呆れ果てている(笑)」

バックニア「ウルク・ハイをボコボコにするのであった」

マスター「死んだ」



---

フドーリン「ええ〜っ？」

マスター「ウルク・ハイは気絶および重症だし。問題はア rilルだが、元々バラールの闇の力を受けて動いていたので、バラールがいなくなると崩れ去った」

バックニア「かわいそうに、墓でも立ててやるか」

マスター「多分バラールに「役立たずめ」と言われたと思うよ「<痺れ雲>など使わせおって」(笑)」

ファラシオン「お前が用意したんじゃない。」

バックニア「てことは次の任務は黒い剣を取り返すことだな」

マスター「ま、次最終回だし。全6回の予定だもん」

バックニア「無理して6回にまとめなくたって(笑)」

マスター「言うなよ〜、俺もそろそろプレイヤーやりたいんだから！」

ということで、黒い剣と白い剣の起源を知る事ができたが黒い剣はナズグルとなったバラールに持ち去られてしまった。そして次は最終回、決戦となる。

---

---

## 次回予告

ついに黒い剣と白い剣の謎が明らかになった  
それはあまりにも悲しくつらい人の業によるものだった  
そして復讐のためナズグルと化したバラール！

いよいよ最後の戦いが始まる

配下を率い、ロリエンを急襲するバラール  
ケレブラント、ペレンノール、そしてモルドールへと戦いの場は移  
り変わる

長かった旅の果てにあるものは？

ACRAP 提供 LOTRRPG

第6回『灰色港のファラシオン』！

乞うご期待！

---

---

## シナリオ作成メモ

はいもまいら。強引なマスタリングで評判の俺様がきましたよと orz

実際第4回までで『ロード・オブ・ザ・リング』との絡みでやりたい事は結構やってしまった感があり、残りの2回は話に收拾をつけるために作成したシナリオになってしまいました。もう少し第4回で謎を進めたかったんだけど殆ど進めることが出来ないまま角笛城で戦っちゃったからね。宿題がたくさん残っていたわけです。そこで一気に片付けるための奇策として「過去への旅」を持ってきました。

既に起こった事にプレイヤーを放り込み、TRPGだからインラタクティブにしつつこちらの筋書き通りに持っていかなければならなかったのは、実は結構大変だった。リプレイにはあまり書いていないけどマスターの「これからどうしよう」的沈黙が3回はありました。

素直に言うと準備が足りなかったんだけどな!!!

改めて読み返してみると、強引さにブーブー言いながらもプレイヤー達はしっかり話に入ってくれて盛り上がる発言をしています。ちゃんと皆が協力して一つの話を作り上げているのはTRPGでマスター冥利に尽きますね。ただ、バッカニアのプレイヤー（仮名ルーシ）だけは入り込みすぎて他のプレイヤー、NPCの発言を奪いまくっています。これは良くないよね。良くないから絶対お前次マスターやれ！話を作ることは（多分）できるんだから、それにうまくプレイヤーの行動を絡めていけばいいだけでしょうが。

話を戻してシナリオ作成上のコンセプトですが、過去への旅への他にもやりたかったボロミアを今回やってみました。しかし、いきなりポッと出てきた嫌な奴がやっちゃあ警戒心抱かれまくりでうまくいきませんでしたな。あれは、プライドは高いけど面倒見が良く、勇敢な戦士というキャラクターがあつてこそ、煩悶も演出できたわけだ。納得。

そんでもって過去の出来事ですが、まあこんな感じと。これに関しては剣を作る場所は確かに「うしおととら」が元ネタになっているけど、その原因は全く違います。とにかくなぜ人間がエルフを憎むようになったのかというところがポイントだった。でもまあこんな感じでしょう。自分でも悪くはないけど会心とは思っていないってレベル。とにかく、現在のいろいろな要素とつなげる事がむしろ重要だったのかな。

あとはバラール。もうライバルライバル言ってたから、いっそナズグルにしてやれ、と。実際映画「LOTR」では残り8人のナズグルについてストーリーなかったし。ナズグルを持ってくるのは当初から考えていた事です。という事でビビりながら、次回戦ってもらいましょう。ここまで来たら余計な冒険などはさまず、純粹に最終決戦という作りに第6回はしました。

ということで次回お楽しみに。いつできるのやら(笑)